

第8回 ESD・社会科理論研究会 概要報告

- ◇開催日時 平成29年4月26日(水) 19時～22時
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 河野(附属小)、新宮(平城小)、中澤哲(平群北小)、
島(郡山西小) 中澤(奈良教育大学)

◇内容

テキスト『学びとは何か』今井むつみ、岩波書店、2016年
第2章「知識のシステムを創る」

・言語の学習を例に

断片化された知識をいくらたくさん持っていても、それらの知識が互いに関連付けられたシステムになっていないと使えない。子どもの言語の習得の過程とは、知識の断片を貯えていく過程ではなく、知識をシステムとして構築していく過程である。

→ そうであるならば、システム化の過程が問題となる。

①無駄なものを見つけて捨てる

外界には情報は無限にあるが、無意識のうちに、無限の情報(外界に存在するモノや出来事、音など)の中から取捨選択を行い、いま処理すべき情報だけを自分の中に取り込んでいる。

→ そうであるならば、取捨選択する無意識はどのように形成されるかが問題となる。

②子どもは知識の意味をざっくりとはあるが自分で見極め、その適用範囲もその場でだいたい判断している。

→ そうであるならば、意味をざっくり見極め、判断するための概念的枠組みをどこで獲得するのが問題となる。

③子どもは、形が似ているモノに対して、その言葉を一般化する「形ルール」を持っており、それを使って、初めて聞く言葉の意味の範囲を決めているのである。

→ そうであるならば、「形ルール」をどのように獲得したのが問題となる。

④形ルールは、共通点や相違点を探る過程で子どもが自分で発見したもの。形ルールはスキーマである。

→ 主体的で探求的な学びによりスキーマは構築されていく。スキーマによって取捨選択している。スキーマによって学習は加速する。

⑤子どもは新しい知識を得るたびに、自己のスキーマ(構造化された知識)の中で整合性がとれるよう、スキーマを修正している。統合されたシステムを作り上げている。

⑥学んだ知識(スキーマ)をベースに新しい概念(スキーマ)を学び、創り出す。

※学習をしながら学習の仕方を学び(整合性を図り、スキーマを修正する)、同時に知識を増やしていく(スキーマを用いて、新たな知識を、整合性を持たせて自分の中に定着させる)。新しい知識は新しいことの学習にすぐに使われる。

※人は自らスキーマをつくり、そのスキーマのフィルターを通してものごとを観察し、解釈し、考え、記憶する。ただし、スキーマは経験的につくられた、いわば「思い込み」でもある。

第3章「乗り越えなければならない壁」

○自分が観察した出来事や経験を自分なりにつじつまがあうように理解したいという強い欲求
(本能的欲求)

→ 観察する様々な出来事について、規則性や因果関係を納得しようとする、納得できるよう理由付けをする。 → スキーマが生まれる。: 経験則のようなもの・目立つ特徴のみに頼ってつくりあげた「思い込み理論」

○子どもはスキーマのフィルターを通して、それに合った情報を取り込み、合わない情報は無視する。

→ 人は自分の信念と一致する現象に注目し、一致しない現象は無視しがち「確証バイアス」

○熟達していく上で大事なことは、誤った知識を修正し、それとともにスキーマを修正していくこと



次回は5月25日(木)19時～
第4章・第5章を講読します。